

# 白脇地区 七か町の由来

## 白羽町（しろわちょう）

「曳馬拾遺」は、白羽地名の起源について「しら浪のよるひる絶えず立つによりてこの名やあるらん、又相良の白羽、掛塚の白羽、一つ国に三つの白羽ある事いかなる故にや、三ヶ所とも白羽の命を祭れるなり」と述べている。

この町の氏神様である白羽神社（前は春日明神社）の祭神は、白羽命である。

遠州灘の白波からくる説の他に、次のような説もある。その昔、六百年ほど前のこと、後醍醐天皇の皇子宗良親王が南朝の勢力を盛り返すために、吉野から軍団を率いて東へ向かう途中大しけに遭った。舟は、遠州白羽にうちあげられた。ある朝、風を切って飛んできた一本の白い矢が松の木に突き刺さった。村人が驚いて矢の飛んできた方角を見ると、貴人が軍団を従えて舟から降りてきた。目の前を通り過ぎていく貴人が宗良親王だと知ったとき、村人たちは道にひざまづき、親王の一行を見送ったという。白羽の地名はここから出ているという。この土地は、南朝方の支配下にあったので、ここを上陸地として宗良親王が伊勢の大湊を出航したことは確かなようである。

## 瓜内町（うりうちょう）

この町の小字を見ると、河原、西川原、川原、野畔、本田、北浦、池、村合、天白、中川原、などがある。この辺りは、太古はおそらく遠州灘が流れ込んでいた入り江であった。また、天竜川の流路でもあった。このことは小字の地名からも十分うかがえる。

また、竜が崎、竜が淵、太子淵と昔からこの町の周辺に住んでいる人々が呼んでいる一帯がある。この淵にまつわる伝説は有名である。馬込川流域の湿地帯はヘビが多い。ヘビや竜に関する伝説が生まれてくる。

- ・あるとき、暗雲が立ち込め夕立が降った。突然、竜が川から天へ舞い上がった。（曳馬拾遺）
- ・天文年間（1532～55）、この淵の近くに都から来た高僧宗円が、いおりを建てた。天井に大きなヘビが住み着いていたので、宗円がお経を唱えるといなくなり、以来、この地にヘビが見られなくなった。（浜松風土記）
- ・昔、海岸が近かったとき、竜を刻んだ木片が流れ着いた。村人はこれを竜神として祀った。これが竜禅寺の観音様である。（同寺の伝説）

この町は、瓜の特産地であった。土地が瓜の栽培、育成に適した条件を備えていたので、瓜地といていた。それが瓜内に変わったともいう。

## 楊子町（ようぢょう）

楊とは柳と同じ類である。柳は、北半球の湿地帯及び亜寒帯に多く見られ、川岸とか湿地に群生することが多い。

江戸時代の初めのころは、三嶋荒屋村または三嶋新屋村と一般に呼ばれていた。その後、家数も増えて田畑も開墾されてきたので、本村より独立した。この付近には、若々しい小さな楊が群生していたり、田のあぜ道に小さな楊を植えたりしたことから、楊の子—楊子と名付けられたという。

林泉寺の故伊藤軌玄住職は、にぎやかなことが大好きで、毎月3日の毘沙門天（びしゃもんてん）の祭りには、お堂を舞台にして青年団や旅役者の興業をさせたそうである。病氣治療で同寺に世話になったことのある歌謡漫談の川田晴久も巡業で浜松を訪れたときには、デビュー間もない美空ひばりや芸能人を引き連れ、小屋入りする前に毘沙門天のお堂で恩返し興業をしたということだ。

毘沙門天は、商売繁盛の神で水商売の女性のお参りが多かった。半玉が姉さん芸者に連れられて来た。源氏名を書いた提灯などを競って奉納したという。